

救急法 2

菅沼 博

前回は救急法の目的、範囲、原則及び直ちに処置が必要な患者に対する基本的な処置技術について述べました。今回はもっと身近なケガ等の処置方法について説明します。

直ちに処置が必要でない患者であっても事故等によるショックで身心共に弱くなっております。そのことを良く頭に入れておき、やさしい態度で患者に接するよう心掛けることが大切です。決してその場で患者のミスや指適したりしないことです。

★観察のしかた

まず第一に患者の様子を良く観察します。

- ① 向いかける。(元気づける、症状を聞く。)
- ② 視る。(出血、はれ、患部の変色、顔色)
- ③ 触れる。(熱、炎症、痛み)
- ④ 聴く。(心臓の音)

出血などがある場合は観察と並行して患部の止血を実施します。そして一般的には患者の一番楽な姿勢で寝かせます。(患者にきいてみる。)この際患者の体温がうばわれてしまわないように保温を実施します。またこの時止血した包帯の結び目が患部の上にならない様に注意し、結び目が上(見やすい所)にくるようにします。

特に山の中では患者をゆっくり休ませ、患者に対しての元気づけを行ない、少し時間をかけて患者の自力回復(ショック症状がおさまり割と普通(空身)に歩ける程度)を

待つこととなります。骨折などで歩行困難な場合は背負って下山することとなりますが、これは救急法というよりも救助法ともいべき技術ですのでここでは省略します。

★患者の寝かせ方

① 患者の一番楽な姿勢が良い



のですが、一般的には水平位にしておおむね向いに寝かせます。

② 日射病や熱射病等顔色が赤



くなっている場合、頭を20cm位(±10cm)高くして寝かせます。

③ ②と反対に顔色が蒼白にな



っている患者は足を20cm位(±10cm)高くして寝かせます。

注意 一般的には患部と上にした体位で寝かせます。また頭を打った患者には①の体位をとります。意識のない患者では嘔吐に注意し、気道確保を行い横向きに寝かせる。

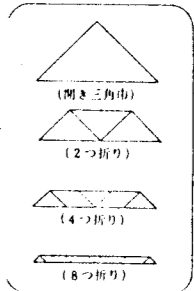
★包帯の使い方

キズ口は保護ガーゼ(滅菌ガーゼ)で覆い、その上から包帯を当てる。

- 保護ガーゼの目的と効果
- 1. 止血 2. 血液分泌物の吸収 3. 傷の保護
- 4. 感染の防止、5. 疼痛の軽減
- 包帯の目的
- 1. 被覆効果 ① 感染防止 ② 疼痛の軽減
- 2. 止血、圧迫 ① 止血効果 ② 分泌物の吸収
- 3. 固定包帯 患部が動かない様に固定する。

• 三角巾のたたみ方

キズ口に当てる三角巾ですので衛生には充分気をつけて、患部に合わせて適当な幅に折りたたみます。



• 巾着三角巾

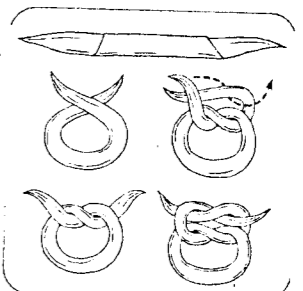
頭、顔面、肩、胸、手足、等の包帯

• たたみ三角巾

額、耳、眼、上腕、肘、膝、足首の包帯

• 三角巾(包帯)の結び方

図のように必ず本結びで結ぶ。この結び方だと後で簡単にほどけます。

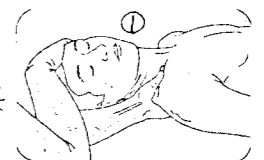


原則として一度かけた包帯は医療機関でほどきます。

★閉接止血の方法

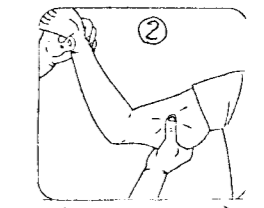
① 鎖骨下動脈の止血点

左右の腕からの出血に効果があります。



② 上腕動脈の止血点

腕からの出血に効果があります。



③ 大腿動脈の止血点

この止血法は図の様に姿勢をとって腕を伸ばして思いきり体重をかけないと効果はありません。



閉接止血では動脈を圧迫して行います。従って動脈をさがしてから圧迫します。(次回はお山のケガ)